

# ティーチング・ポートフォリオ

大学名 人間総合科学大学

所 属 人間科学部

名 前 藤田益伸

作成日 2023年9月20日

## 1. 責務 (何を行っているか、何を果たしているか)

2023年度は、以下の科目を担当中である。

学部科目「総合演習(探究)(選択、B4)」。

大学院科目「心身健康科学特講(必修、D1・M1)」「心身健康科学特殊演習1・2・3(必修、D1・2・3)」「心身健康科学特論1・2・3(必修、M1)」「心身健康科学研究1・2(必修、M1)」。

大学院健康情報マネジメントプログラム科目「サイエンスコミュニケーション学(必修、M1)」「健康情報計測学(必修、M1)」「健康情報処理学(必修、M2)」「ストレス評価学(必修、M1)」「健康支援演習(必修、M2)」「ストレスマネジメント演習(必修、M2)」

専攻内担当として、「合同ディスカッション(必修、D1・M1)」の担当および、日本心身健康科学会の院・学会連携担当の職務に従事している。

委員会活動は、「地域・産学連携センター」「図書館運営委員会」委員に就任している。

地域連携の職務として、「埼玉県立岩槻はるかぜ特別支援学校 学校運営協議会委員(会長)」を務めている。

その他、本学研究所主催の「第70回心身健康科学サイエンスカフェ」の講師、日本心身健康科学会主催の「第32回心身健康アドバイザー講習会」の講師を務めた。

本学の教育研究上の目的である「よりよく生きるための知恵の創出」を踏まえ、学生が自ら心身健康科学の知見に立って科学的素養と実践的能力を統合できるよう、学修者本位の教育を強く意識した教育活動の実践を心掛けている。

## 2. 理念 (教育に対する考え方)

本学のミッションである「心身健康科学を通して自立と共生の心を育む」に強く共感し、人間の総合的理解と心身相関の理解を基に、心身ともに健康で豊かな暮らしができる社会の構築に寄与できる人材の育成を目指す。

文部科学省の「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」を踏まえ、また、内閣府教育未来創造会議の第一次提言において未来を支える人材像として「好きなことを追究して高い専門性や技術力を身に付け、自分自身で課題を設定して、考えを深く掘り下げ、多様な人とコミュニケーションをとりながら、新たな価値やビジョンを創造し、社会課題の解決を図っていく人材」と示されている。具体的には、「全ての子供が努力する意思があれば学ぶことができる環境整備」、「一生涯、何度でも学び続ける意識、学びのモチベーションの涵養」「年齢、性別、地域等にかかわらず誰もが学び活躍できる環境整備」等があげられている。これらの提言は、本学の教学マネジメントに強くフィットしており、所属先の通信制教育の利点を活かした教育によって達成すべき目標であると捉えられる。

私は大学で心理学を学んだ後、高齢者施設での介護職・相談員やコミュニティワーカー等の福祉の仕事に従事した。研究を通して根拠を示し社会福祉の諸課題(環境と社会)の改善を働きかけていく、アクションリサーチに取り組んでいる。福祉実践の中で、個別ニーズにコロナ禍と大学生のメンタルヘルスの調査を行う中で、多くの若者が社会に大事にされている実感を持ってないことが判明している。

「学修者目線」の教育として、第一にVUCA時代に学生自らが必要な資質・能力を獲得し、自らの力で人生を切り開く生きる力となる真の教養を身に着けることを目指す。18歳で入学する日本人だけでなく、社会人、留学生など多様な価値観が集まるキャンパスにて、学生が主体的に切磋琢磨に努め

られるような教育を実施する必要がある。第二に、学修前後において学生自らが「わかる」「できる」「やるぞ」と自己肯定感を持てるよう、個々の学生への動機づけや特別な教育ニーズへ対応しながら、充実した学生生活を送れるよう教育に臨みたい。

### 3. 方法（教育方法において大切にしていること）

心身健康科学では、Bio-Psycho-Social モデルを踏まえて人間の全体像を科学的に理解することが求められる。これまでの社会福祉学・心理学の経験を踏まえて、福祉現場の実例を挙げたり、学生の経験を引き出したりながら、具体例から抽象的な概念の理解につなげる講義を実施している。また、IPE（専門職連携教育）の研究経験を活かし、グループワーク演習等では、「学生が共に学び、お互いから学び、お互いについて学ぶこと」を促すよう、場の心理的安全性を確保した上での対話と相互交流ができる課題・ワークを用いている。知識の丸暗記やハウツーではなく、対話を通して自分自身で課題を設定して考えを深く掘り下げられるよう、あわせて自分だけではなく他者に対しても思いやりが持てるよう、自立・共生の価値観を深く理解できるよう教育に励んでいる。

次に、学生一人ひとりの学びの動機や目的は異なり、仕事や人間関係の悩みなどの生活上の課題もまた学習に影響を与える。学生の学修進度は十人十色であり、また発達障害等の何らかの障害を有する者の割合が年々増加していると肌で感じている。授業の公平性を図りながらも、学生の個別の教育ニーズに対応した支援を行い、小さなつまづきの段階で支障を取り除く必要があると考える。本学の担任制度を中心に、一人ひとりの学生の声を聞き、本人の目標と取り巻く生活状況をしっかりと把握し、各々に応じた丁寧な面談を心がけている。学生自身がどんな自分になりたいか、そのために何を学ぶかといった学習、むしろ人生の目標を明確にできるようサポートし、学生の個別性に配慮した教育を展開したいと考えている。

三点目に本学の全ての授業科目は密接に関連し、教員は担当授業を自己完結してはならないと考える。教育内容について常にオープンな姿勢で臨み、学生の声や授業評価は真摯に受け止めて、次年度以降の教育を改良する。あわせて授業内外でも教職員と細やかに報告、連絡、相談ながら情報を共有し、連携を取りながら一人ひとりの学生の学びを下支えできるよう努めている。

### 4. 成果（学生さんからの評価に対して、学生さんの学修成果について）

着任後6ヶ月目で、個別担当の授業は未実施で、また授業評価アンケートはほぼない。「総合演習（探究）」は現在の所、順調に論文に取り組んでいる。「心身健康科学研究1」の修士学生には、用語の定義など基礎を固めるよう指導し、提出物も遅滞なく提出されている。

### 5. 目標（教育活動の中短期目標と達成時期）

中期目標は、本学の教学マネジメント、教育システムを理解して学科・専攻運営に貢献できるようになること。短期目標は次の3点である。(1) 大学院の授業展開と研究指導方法の理解と習得(達成時期 R6年3月)、(2) 通信制教育の仕組みの理解と習得(達成時期 R6年9月)、(3) 自分の授業の立案、実施(達成時期 R6年9月)。

\* 表紙を含め、全体として、3～10ページ程度とします。

**【添付資料】**

\* TPの記載内容を客観的に示すためのエビデンスとなる資料項目を箇条書きで列挙ください。  
(シラバス、開発教材、学生アンケート等、特に特徴的なものを列挙し、必要に応じて、すぐに確認できるようにしておきます。)